

談話構造図作成法による ノートテーキングの訓練効果について

西 條 美 紀

キーワード

談話構造図作成法 階層構造 ノート得点 自由再生課題 訓練効果

1. 本研究の目的

日本語学習者（以下学習者）が日本語の講義を聞く際の方法については、個々の学習者任せというのが大学における留学生の現状のようである。日本語能力が上級に達していても、学習者が自分の専門分野の講義を聞いて理解するにはかなりの困難が伴い、心理的にも負担であろうことは容易に想像できる。しかし、日本語教育の一環として、講義の聴き方が指導されることはあまりなく、大学に留学した学習者は、それぞれにストラテジーを駆使して、講義を聴いている。山下(1998)は、大学の講義の受講者は、日本語母語話者、学習者ともに講義を理解する時に文字情報に頼っていることを実証的に示したが、このことは、学習者のみならず母語話者にとっても、自分なりの方法で講義を聴いて理解することは難しいということを示唆している。では、なぜ大学の講義を聴いて理解することはむずかしいのだろうか。

重松・長谷川(1987)は、講義を聴くために必要とされる言語能力について、「問題は話をいかに論理的に整理して聞くかであり、それはどのような観念（普遍・限定）からなされているか、それを瞬時に見抜き、その概念にしたがって話を整理、書く能力である」(p.107)と述べている。このようなことは、母語であってもむずかしい。しかし、講義を正確に理解するためには、必要な能力であろう。では、どのようにしたら講義の要点を整理しながら聴けるようになるのだろうか。本論では、そのための方法として、西條(2000)に示し

た「談話構造図作成法」によるノートテーキングの方法を、上級学習者10名に対し実践し、そのうちの9名について訓練効果を検討した。これによって、学習者の専門分野を問わない講義理解の方法についての示唆を行いたい。

2. 講義談話の構造

ノートテーキングの訓練実践について述べる前に、その理論的裏付けとなる講義談話の構造についての本研究の仮説を述べ、方法の当否を検討したい。

2-1 講義談話の構造についての仮説

通常、講義者は、聴衆に伝えようとする内容について、あるいはその伝え方について、あらかじめ何らかの計画を持つ。しかし、ノートを読み上げる方式でない限り、講義者は講義について事前に完全な計画を持つことはなく、計画は常に部分的になされ、講義は、あらかじめあった計画を修正したり、あらたな計画が生まれたりして進行して行く。そういう意味で講義は、部分的に計画された談話であると考えられる。では、このような特徴を持つ談話である講義は、どのような構造を持っているのだろうか。

ブラットマン（1994門脇俊介・高橋久一郎訳）は、「計画は典型的には階層的な構造を持っている。目的に関わる計画は、手段や予備的手続に関わる計画を埋め込んでいる」（p. 56）と述べている。本研究では、この考え方にに基づき、部分的に計画された談話である講義にもアドホック¹⁾に形成される階層構造が認められるのではないかと考えた。また、説明的な談話の構造を検討した西條（1996）、西條（1999）から、談話中のメタ言語的表現が、講義においても談話を構造化する機能を担うのではないかと考えた。ここで言うメタ言語的表現とは、言及表現と「言うコトに言及するタイプの接続詞」（甲田1996）である。

甲田（1996）は、言うコトに言及するタイプの接続詞として、「なぜなら（ば）、だって、というのは、すなわち、要するに、たとえば、ただし、もっ

1) ここでいう構造とは、いわゆる叙述の型というようなあらかじめ想定できるような構造ではない。談話の進行中に、談話の内容と結びついた形で形成される構造であり、その意味で、アドホック（その場限り）に形成される。

とも、なお、ちなみに、つまり」を挙げ、「これら、注釈の接続詞は、前の表現を受けてそのレベルを変更し、一段階上の（あるいは別の）把握・解釈として関連づけるものである」（p. 31）と述べている。本研究でもこれらの接続詞を言及的な側面を持つ表現として、メタ言語表現に含める。そして、「講義においては、メタ言語表現が談話を構造化し、その構造は階層的構造であるだろう」という仮説をたてた。

2-2. 談話構造の仮説についての検討

仮説を検討するために、講義の例として、『講義を聴く技術』（産能大学出版社）に収録されている講義9「家族観」を取り上げ、その談話構造を分析する。この講義を取り上げたのは、後に述べるノートテーキング訓練の実践において使用した教材であり、次章において学習者のノートと談話の構造図を比較するためである。

談話の構造を知るためには、談話をユニットに分けて、相互の関係を考察することが必要である。本研究では、談話のユニットとして、「ひとつの動詞とひとつ、またはそれ以上の名詞」（Clark & Clark, 1977）からなる命題を単位とした。命題は「何がどうした、何がどんなだ」を述べる叙述の基本的な単位と考えられるからである。Appendix 1にこの講義の命題ユニットを列記した。スクリプトから命題ユニットを抽出するにあたっては、以下の規則を設けた。

- ① 1ユニットには基本的にひとつの本動詞が含まれる
- ② 「……と思います」、「……がわかる」はユニットを形成する動詞とはしない
- ③ 言及表現は、動詞が含まれていても1ユニットとせず、言及するユニットとともに示す
- ④ 「です」、「だ」はユニットをなす動詞とし、文脈から省略されていると考えられる場合にも1ユニットとする
- ⑤ 動詞を含む連体修飾節も1ユニットとする

以上の規則で、命題ユニットを同定したところ82ユニットとなった。この全

体のユニットの中から、先に述べたメタ言語表現を抜き出して、一定の規則に基づいて配置した結果、ユニット間にまとまりができ、その相互に階層的な関係が認められれば、メタ言語的表現が談話に階層的な関係を与えていると言えるのではないだろうか。本研究ではそのように考え、以下の規則に基づいて、ユニットを配置し、構造図とした。

- ① 命題ユニット中のメタ言語表現をマークする。
- ② メタ言語表現を含むユニットの内容をメタ言語表現とともに、縦に因果関係、横にその内容についての説明が来るように配置して行く。
- ③ 配置したユニットを因果関係については縦方向の下向きの矢印（↓）、前に述べたことに定義や解釈をあたえる遡及的因果関係については縦方向上向きの矢印（↑）で示す。各ユニットの詳細や、派生する事柄について述べる敷衍については、横向きの線（—）で示す。

以上の手続きに従って、「家族観」の講義の談話構造図を作成したところ、Appendix 2に示すように、かなりはっきりとした階層構造が示された。このことから、「講義においては、メタ言語的要素が談話を構造化し、その構造は階層構造である」という仮説がこの講義においては、妥当することがわかった。

この結果がただちにすべての講義についてあてはまるわけではないが、メタ言語表現に注目して、上記の方法で構造図を描いてゆくことが講義の内容とその構造を知る、つまり、重松・長谷川(1987)の言う、論理的構造を瞬時に見抜いて、それにしたがって内容を記述して行くことにつながるという見通しを得ることができた。

3. 談話構造図作成法によるノートテキングの効果

前項で述べたような、談話の構造についての理論的枠組みのもとに、早稲田大学で上級学習者10名に、筆者が聴解授業の一環として、ノートテキングの訓練を行った。この訓練の目標は、講義のノートを1週間後に見ても、その講義の内容を正確に思い出せることにおいた。この目標設定は、西條(2000)で

述べた「よいノート」についての考察に基づいている。

ノートテーキングの訓練を受けた10名のうち、9名については、彼らのノートほかのパフォーマンスについてデータとしてよい旨の了承を得ているので、この9名のデータについて分析し、談話構造図作成法によるノートテーキングの効果について検討したい。

3-1 対象者

分析の対象とした学習者の国籍の内訳は、中国3名、韓国3名、ロシア1名、デンマーク1名、オーストラリア1名である。専攻は、経済学1名、日本語学1名、法学1名、運動生理学1名、教育学1名、あとの4名については、専攻は未定とのことだった。いずれの学習者も日本語学習歴は3年以上あり、早稲田大学日本語センターの聴解クラスでは最上級のレベルの学生である。このうち、6名が学部、大学院において、日本語による講義の受講経験があった。

3-2 分析材料

談話構造図作成法によるノートテーキングの訓練はおよそ次のように行われた。

- ① 談話におけるメタ言語の役割についての教師による説明
- ② 談話中のメタ言語的表現を抜き出す訓練
- ③ 談話構造図作成法²⁾のやり方についての説明
- ④ 構造図作成法を使ったノートテーキング（『講義を聴く技術』の講義1-9、NHKの「クローズアップ現代」をビデオ録画したもの3回分）
- ⑤ 講義の自由再生課題

2) 次のような指示をした。1) A4の紙を用意する。2) 講義は2回—3回聴く。違う色のペンで同じ紙に書きこんでいく。3) 聞き取れなかった所はあけておき、後で書きこめるようにしておく。4) 聞き取れた内容を縦に因果関係、横にその内容についての説明がくるように配置して行く。5) 配置した因果関係については、縦方向の下向きの矢印（↓）、前に述べたことに定義や解釈を与える遡及的因果関係については上向きの矢印（↑）、詳細について述べる場合には横向きの矢印（→）で示す。

- ⑥ 学習者のノートテーキングの方法についての教師によるコンサルテーション
- ⑦ 訓練についてのアンケート

この中の、「講義の自由再生テスト」は、『講義を聴く技術』の講義9（構造図作成法による訓練の3回目）と講義3（構造図作成法による訓練の9回目）について行われた。これは、講義のノートを取った後、教師がノートを回収し、その1週間後に学習者にノートを返却し、ノートだけを見て、講義をできるだけくわしく思い出して、そのまま書くように指示したものである。どれだけ正確にテキストを再生できたかを計るテキストの自由再生課題は、先行研究（内田1990, Bernhart1991, Flowerdew & Tauroza 1995, 西條1999）においてテキスト理解を計る有用な手段とされている。ノートを取るのは、講義を理解し、忘れないようにするためである。したがって、ノートの効果は、講義を聴いてから一定の期間の後、その内容の理解を正しく保持し、再生できたかを見る再生課題の得点と、講義の内容と構造をどのくらい反映したノートが取れたかを表すノート得点との相関において計られるべきである。本研究では、このように考え、講義9の再生課題の再生文とノートを分析材料とする。

3-3 分析方法

前項で述べたように、ノートの効果を検討するために、学習者のテキスト再生の得点と、ノートの得点の関係をみる。

まず、講義理解の程度と、ノートを見て行う再生の正確さを見るために、テキスト再生文を命題ユニットに分け、講義9の命題ユニットのうちの何%を再生できたかを示す再生率を求め、再生得点とした。再生文のユニットが、テキストのユニットを再生できているかの判定と採点は以下の基準で行った。

- ① 表記、文法の間違いは無視し、内容が再生できていれば1点を与える
- ② メタ言語部分、文末表現部分は省略、変容されていても得点を与える
- ③ ユニットの再生順に異同があっても、内容が正しければ得点を与える

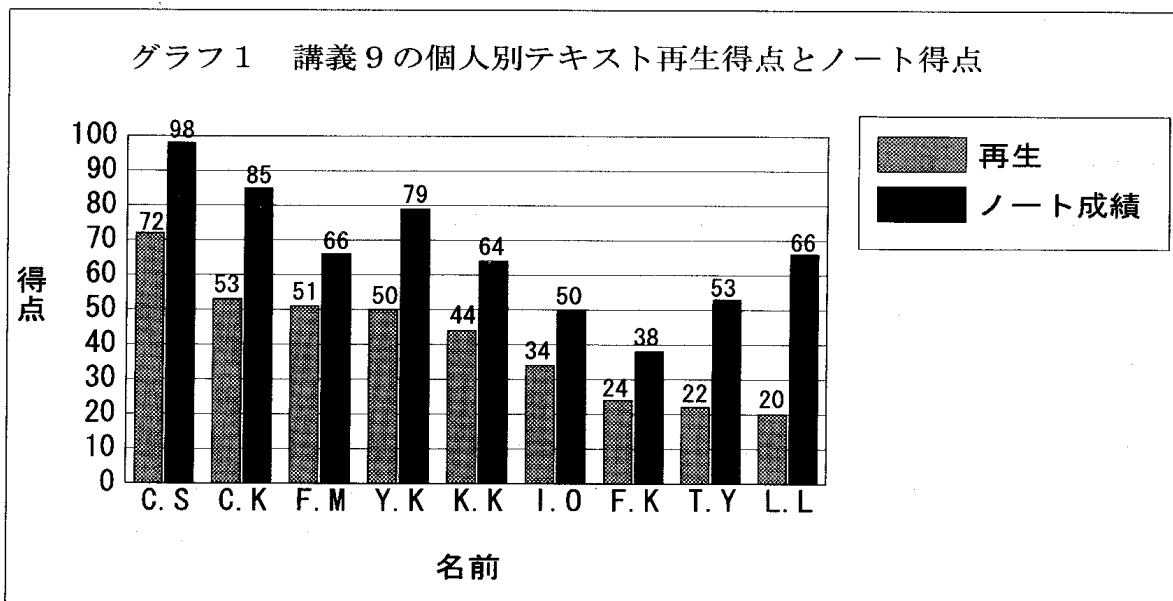
次に、学習者のノートがどれくらいテキストの内容と構造を反映し得たのかを採点するために、Appendix 2 の構造図から、ユニットのカテゴリー分けを行った。構造図に示された階層のうちの最大のものを1類：談話展開決定ユニットとし、その次に大きなものを2類：主内容構成ユニット、最小のものを3類：派生内容構成ユニットとした。Appendix 3 に、命題ユニットの中から、メタ言語と内容語（少数の機能語を含む）を抜き出したリストを示す。

学習者のノートを採点するにあたっては、各ユニットの内容語が書かれていれば、ユニットの階層に応じた得点を与えた。すなわち、1類ユニットには8点、2類ユニットには4点、3類ユニットには2点を与えた。このように、各カテゴリーのユニットに重み付けをした得点を配分することで、ノート得点に、テキストの内容だけでなく、テキスト構造の反映の程度も含めることができると考えた。

3-4 結果

グラフ1に講義9の個人別テキスト再生得点とノート得点を示す。

このグラフから、再生得点とノート得点の間にはある程度の相関がありそうだが³⁾、ノート得点と再生成績に大きな差のある学習者もあり、よいノートが



3) 再生得点とノート得点の相関については、調査対象人数が少ないので、統計的に検定することはできなかった。

よいテキスト再生に結びつくかどうかには個人差がありそうであることもわかる。今回、再生とノートの得点に大きな差があるのは T.Y と L.L であるが、このふたりの再生文には、オリジナルのテキストにない、学習者の創作による命題ユニットが多く挿入されていた。このことは、ノートにあまり依存せずに、記憶によって、あるいは思い込みによって、再生が行われた可能性も示唆している。

4. 考察

本研究は、日本語教育の場で実践でき、学習者の専門分野を問わず適用可能な講義のノートテーキングの方法を検討することを目的としている。そのために、講義談話の構造を分析し、談話構造図作成法という方法を検討し、その方法による訓練効果を検討した。無論、今回の分析のような小人数に対する実践では方法の効果を測定することはむずかしいが、講義談話の構造についてのメタ言語的観点から、談話構造図を作成することによるノートテーキングの方法の可能性を示唆できたのではないかと考える。しかし、今回、材料文としたのは、4分程度の短いものであり、実際の講義のように長い談話であっても今回見られたような階層的構造がみられるのかどうかについて、検討する必要がある。また、調査対象者の人数を増やして、理解とノートテーキングとの関係を明らかにすることも今後の課題としたい。

参考文献

- E. B Bernhard 1991 *Reading development in a second language*. Ablex Publishing Corp. New Jersey
- H. Clark & E. Clark 1977 *Psychology and Language*. New York: Harcourt Brace Javanovich
- Flowerdew, J. & Tauroza, S. 1995 The effect of discourse markers on second language lecture comprehension. *Studies in Second Language Acquisition*, 17: 435-458.
- 甲田直美 1996 「接続詞とメタ言語」『日本語学』第15巻11号 pp. 28-34
- M. ブラットマン 門脇俊介・高橋久一郎 訳 1994 『意図と行為』産業図書
- 西條美紀 1996 「ディベートにおけるメタ言語」『日本語学』第15巻11号 pp. 68-75
- 西條美紀 1999 『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
- 西條美紀 2000 「談話構造図作成法によるノートテーキング」『講座日本語教育』第36分冊早稲田大学日本語研究教育センター pp. 53-68

- 重松淳、長谷川恒雄 1987 「講義の聴解指導」日本語教育 第64号 pp.99-108
- 内田伸子 1990 「物語のテーマの統合における〈欠如—補充〉 枠組の役割」『発達心理学研究』1—1 pp. 30-40
- 山下直子 1998 「外国人留学生の講義理解に関する研究—意識調査とノート・テーキング」お茶の水女子大学 平成10年度修士論文（未公刊）

Appendix 1 講義9「家族観」命題ユニット

1. 次に日本人の家族観というところに移りたいと思います
2. 一体日本人は家族というものをどんなふうにとらえているのでしょうか
3. それで、ちょっと堅い話になるかもしれませんが
4. 「家族法」について、おもしろい話があるんで
5. ちょっと聞いてもらいたいと思います
6. 歴史的に近代と言いますと、日本の場合、明治からを指しますが
7. その明治時代と戦後には、日本は2つの対極的な家族法を持ったんです
8. 最初のものは1898年のもので
9. あとのものは戦後に制定された
10. 今も使われているものなのです
11. 1898年に制定された家族法ってのは
12. 実はその8年前、1893年から施行されることになっていた家族法の
13. 否定の基に作られたものだったそうです
14. この結局世の中に出なかった幻の家族法とは
15. どんなものだったのでしょうか
16. 実を言うとそれはフランスの民法をモデルに作られたものだったんです
17. フランスというと個人主義という言葉が、すぐ出てきますが
18. やっぱり当時のフランス民法もこの個人主義と血統主義が根本原則だったらしいですよ
19. これじゃ当時の日本人の家族観と真っ向から対立するだろうってのがすぐにわかりますよね
20. たとえばフランス的発想だと
21. 妻は夫の両親とは法的に何の関係も発生しないということなんです
22. 日本の生活慣行ではまったく逆で
23. 夫の両親には子としての関係を結ぶことになっています
24. 当時の日本はこの親に対する恭順をもっとも大切だとした儒教道徳が
25. 浸透していましたから
26. 今もそれが続いているとも考えられますが
27. ともかくその幻の家族法は日本の家庭道徳を壊すものだとして
28. 猛烈な反対に会い
29. 却下され
30. 結局1898年に交付された家族法は
31. 家父長制の上に成り立つもの
32. つまり、家の主人が家族の中で、最高権力者になって
33. 家のものを治めるといったものになったんです
34. ところで、フランスと日本の根本的家族関係の違いってのはどういうところにあるのでしょうか
35. それはですね、フランスにおける家族関係の根底には独立した個人というものがあつたが

36. 日本の伝統的な家族観に基づけば
37. それは家という制度であったわけなんです
38. まず血縁的生活共同体としての家
39. つまり、自分たちの家の経済はお互いに自分たちで守っていくという
40. いわゆる、生活の防衛組織とでも言うんでしょうか
41. そういうものがしっかりあって
42. そして、個人は結婚や出生によって
43. その家の新しいメンバーとしての資格を得ることになる
44. 結婚すると女性は
45. 姓が変わるのも
46. こういった家族関係を反映しているということがわかる
47. 今でもこの考え方は日本人の家族観の主流をなすものなんです
48. 最近のある調査によると20代から50代の夫婦を対象に
49. 家族とは何かという質問をしたんですが
50. 「人間が生きていくために必要な社会の最小単位」と答えた人が
51. いちばん多かったということなんですね
52. 話を戻しますが、この家の存続こそが日本の社会では最も重視されてきたわけで
53. 家の長であるものは家の存続に責任があり
54. つまり家というものは自分のものじゃなくて
55. 先祖からの預かり物なんであって
56. 子孫へ継承されなきゃいけない
57. ですから、たとえ、明治時代に制定された家族法で、
58. 家長の家族に対する権限が絶対的なものだったとしても
59. それは家長の家の存続に対する責任の上にある権力で
60. 個人にあたえられたものではなかった
61. 仮の権力者ということになりましようかね
62. ですから、さっき明治時代の家族法は家父長制に基づいて作られたって言いましたけれども
63. ここで言う家父長制の本当の意味ってのは、家長、家の主人がですね、責任を持って
64. 家を守る
65. 家を存続させるっていうことで
66. 決して家の主人がすき放題、権力を行使する
67. いわゆる専制君主的家長っていうようなものではなかったんです
68. だから、戦後民主主義という政治思想をモデルとして
69. 新しい家族法が制定されましたが
70. こんな具合で法律的に家長の権力がなくなっても
71. 生活そのものは変わらなかったんです
72. 日本人の多くは専制君主的家長を経験していなかったし
73. 個人主義的でもなかった
74. しかしですよ、しかし変わるとすれば

75. これからですね
76. 現に、離婚の増加、親子間の亀裂が目立っていますが
77. これはですねえ、日本人の一人一人が経済的に豊かになったこと、
78. また、個人主義的思想の浸透によって、
79. なにも家族みんなで家を守る必要は
80. ないと考えるようになってしまった
81. つまり、生活の、共同防衛組織としての家の制度を支えていた前提が
82. なくなってしまったんだと思うんです

Appendix 3 講義9 テキスト構造化ユニット

テキスト構造化ユニット：メタ言語的表現＋内容語（少数の機能語を含む）

1 類：談話展開決定ユニット

1. 日本人の家族観（というところに移りたいと思います）
2. （堅い話になるかもしれませんが）家族法（面白い話があるんで）]
3. （さて）（ところで）私の家族関係のちがひ（ってのは）
4. 変わるとしたらこれから（しかしですよ）

2 類：主内容構成ユニット

- 1) 近代（という）：明治、戦後、対極的家族法
- 2) (最初のものは)：1898年のもの、(あとのものは)：戦後のもの
- 3) (実は)：1893年の否定、幻の家族法 (とは)
- 4) (実をいうとそれは)：フランス法をモデル
- 5) 当時の家族法と対立 (するだろうってのがわかる)
- 6) (ともかく)：家庭道徳を壊す、反対
- 7) (結局) 家父長制、家族法
- 8) (それはですね)：仏独立した個人が根底、日：家
- 9) (ある調査によると) 家族とは何か：社会の最小単位
- 10) (話をもどしますが)：家の存続、日本社会で重視
- 11) (こんな具合で)：戦後、民主主義、法律は変わる、生活は変わらない
- 12) (これはですね)：日本人が豊かに、個人主義の浸透
- 13) (つまり)生活防衛組織としての家、前提がなくなる

3 類：派生内容構成ユニット

- ① フランス（という）
- ② (やはり) 個人主義、血統主義
- ③ (たとえば) 仏：妻、夫の両親、関係ない、日：子としての関係
- ④ (つまり) 家の主人、最高権力者
- ⑤ (つまり) 家の経済、自分たちで守る
- ⑥ (いわゆる) 生活共同体としての家
- ⑦ (だから) 女性、結婚、姓が変わる
- ⑧ (こうした) 家族観を反映 (してるってことがわかる)
- ⑨ (つまり) 家、先祖からの預かり借りもの、子孫に継承
- ⑩ (ですから) 家長の権限、仮の権力者
- ⑪ (ですから) 家父長制に基づく
- ⑫ (家父長制の本当の意味ってのは) 家の主人、責任、家を守る
- ⑬ (いわゆる) 専制君主ではない